

(抄録)

研究課題名：民俗芸能の社会構造の変化に関するスポーツ人類学的研究

- 獅子舞の伝承を取り巻く社会を中心に -

研究代表者名：松本 彰之

目的：本研究の目的は、1980～2020年代における富山県砺波市の砺波獅子（百足獅子の一種）の活動を歴史的・人類学的に検討することを通して、その伝承の形態の実態を明らかにすることである。

方法：①富山県砺波市を対象に、民俗芸能の活動の実態を調査する。

②砺波市の砺波獅子の活動に関わる団体の人びとを対象に、聞き取り調査及び調査票による調査を行なうとともに、実際の活動の様子を参与観察等フィールドワークの方法により調査する。

結果：①富山県砺波市には獅子舞が多く分布しており、昭和53年には約200か所を数えている。平成25年には、休止している地区も含めて、84か所において獅子舞が行われている。地区の数は21地区あり、そさらに集落ごとに獅子舞を実施している。富山県砺波市は、獅子舞が有名であるが、その他に田祭りの砺波夜高が行われている。さらに、子供歌舞伎も盛んに行われそれらのさまざまな民俗芸能が一年のサイクルを通して実施されている。また、この中で獅子舞と夜高の両方を行う地区もある。準備や練習には、時間と労力を要することであろうが、それらは人びとの生活に根付いており、むしろそのことを楽しみにしている実態が明らかとなった。

②コロナ禍の状況下で、感染者が急増し現地でのフィールドワークを実施することは叶わなかった。しかし、砺波市役所の調査協力者の協力を得て、市役所内の獅子舞関係者を中心にアンケート調査を実施することができた。回答総数は124件となり、それらのアンケートを整理し、傾向を分析した。回答者のうちインタビューについての同意を得られた方々の中から4名（東般若2名、南般若1名、青島1名）を抽出し、オンラインにてインタビュー調査を計4回実施した。今回、インタビュー調査を実施した4名（3地区）からは、いずれも新型コロナウイルス感染症対策下、昨年と同様に獅子舞を居住地区において実施するに至らなかったとの回答結果であった。そのためさらに、各地区（集落）の獅子舞の実態を明らかにするため、対象者の周囲の状況、獅子舞の練習状況や関わり方、家族構成など、獅子舞の伝承を取り巻く社会組織に関する内容の項目を加えてインタビュー調査を行なった。ここではそのうち、インタビュー調査によって得られた各地区（集落）の獅子舞の取り組みについて、概要を述べることにする。なお、獅子舞を行う時期は、3月～4月、8月～11月と地区（集落）ごとに異なっている。

- ・東般若1：10月実施。3週間前から毎日19時30分～21時まで練習。場所は白峰神社境内。子供の練習はOBの方が主に指導をしている。
- ・東般若2：10月実施。3週間前から毎日20時～22時まで練習。場所は五社神社境内。OBも練習の稽古に参加し、指導を行なっている。
- ・南般若：10月実施。10月上旬から19時～22時まで練習。うち19時～21時までは、子供も参加して練習をし、21時～22時までは大人のみで練習を行う。場所は公民館広場屋外（東石丸）。現役同士で、獅子や足の回し方を教え、子供の獅子取りはOBが指導する。（口伝）
- ・青島：3月と9月実施。2週間前から平日夜週3回、19時～21時まで練習。場所は公民館（青島上村）。フルメニューという神社で奉納する舞を何度も繰り返し、休憩の合間に子供たちの練習を行う。

考察：富山県砺波市の獅子舞には、子供（小学生）の時期に、獅子取りという役がある。その役は、選抜された者のみが行うことができる。このことは、この民俗芸能の伝承に関する重要な一要素になっている。実際に、獅子取りを行なった者が、その後の後進の指導や大人獅子の獅子頭やお囃子などを担う中心人物となる構図であることが明らかとなった。さらに、獅子舞の担い手の中心である保存会の会員とそのOBは一体をなして、子供の指導や大人の舞の指導等の各役割を果たしていた。また、獅子舞を地域に根付いた民俗芸能として位置付けた上、砺波市や教育委員会等行政側との協力体制が整備され、地域が一丸となって伝承を支える組織となっていた。